

120 高円寺のアパート ハルミの部屋

村上、ジリジリしてミハルに声をかける。

村上「並木君、ちょっと聞きたいことがあるんだ」

ハルミ「(ヒステリックに)遊佐<sup>ゆさ</sup>って人の事なんか私何も知らな

いわよ……警察の人って、しつっこいから大嫌い！」

母「……お前……」

ハルミ「お母さんは黙ってて……私たち、言いたくない事を、

言わない権利ぐらいあるんだわ」

村上、思わず熱くなって、

「君……相手が強盗殺人の容疑者でも、かばう権利がある  
と言うのかね？」

ハルミ、さすがに青くなる。しかし、すぐ頑固な顔  
になってつぶやく。

「……でも、知らない事は知らないわ」

母「嘘おっしゃい！ 今まで居たじゃないか！」

村上、キツとなる。

佐藤は、至極当然という顔で、

「このマッチは、遊佐が持って来たんですね」

佐藤、手にしたマッチを示す。

母「……つきまとわれて、嫌だ嫌だって言ったクセに……」

佐藤「(ハルミに)遊佐は、今どこにいるか知らないかね？」

ハルミ、強情にそっぽを向いて動かない。

母「さア、おっしゃい……おっしゃいたら！」

ハルミ「……」

母「ハルミ！ 知ってる事をみんな申し上げるんだよッ！」

ハルミ「知らないったら、知らないわ」

母「本当に知らないんだね……本当に……」

ハルミ「知らないってば」

母「嘘つくど承知しないよ！」

お株を奪われた佐藤は、苦笑して村上を促して外に  
出る。

佐藤と村上が出て来る。

佐藤「どうやら追い込みだな……あの娘の気まぐれに付き合つて  
る暇わない……俺はこのマッチ箱のホテルから手繰たぐって  
行く」

村上「僕はどうしましょう？」

佐藤「君は、もう少しこの部屋にねばってみろ……お・ふ・く・ろ・つ  
て奴ア娘の事に関しては素晴らしい検事だ……下に電話が  
あつたな……あれで連絡する……ああ、それから、君、ピ  
ストル持つてるかい？」

村上「はア、持ってます」

佐藤「あいにく置いて来ちゃって」

村上、ホルダーごと拳銃を渡そうとする。

佐藤「いや、ケースはいい」

佐藤、拳銃をズボンに挟むと、

「遊佐は帰ったばかりだ……おそらく、今夜はここへは現  
れまい」